

~~~~~

## 遊びが言葉を育てるわけ

楡の会こどもクリニック

院長 石川 丹

~~~~~

A. 遊びの発達

子どもの遊びにはいろいろありますが、ここではごっこ遊びを取り上げます。ごっこ遊びは想像力を育てる智慧遊びです。

I. ごっこ遊びの発達順序

ごっこ遊びは、ふり、見立て、成り切り、の三つによって構成されていて、その発達順序は、ふり→見立て→成り切り、です。

1) ふり

1歳頃になると、空のコップで飲むふりをします。次いで、おもちゃの食べ物を口の中に入れて食べたふりをしながら「アムアム」と言ったりします。更には、絵本の中の食べ物の絵を取るふりして口に入れるふりして噛むふりをします。

これがごっこ遊びの始まりです。飲んでないのに飲んでるつもり、食べてないのに食べてるつもりになっています。空気を水の代わりにして吞んでいる、空気を食べ物の代わりにして食べている、と言う行為です。空気と言う代理品を使いこなしていることになります。代理品を使った遊びです。

2) 見立て

2歳頃になると、長方形の積み木を「ブーブー」と言いながら走らせたりします。積み木をミニカーの代わりにして使っていることになります。つまり、代理品を使いこなしています。ある物を別な物で代理させることを見立てと言います。ですから、見立て遊びも代理品を使った遊びです。

3) 成り切り

2歳半を過ぎると、キャラクターに成ったふりをするようになります。例えば、アンパンマンになって「アンパンチッ」と言いながらパンチします。次いで、レジ係になって買い物ごっこをしたりするようになります。3歳頃になると自分のお母さんに成ったふりをします。別の人格になったふりを成り切りと言います。

成り切り遊びは自分を別な人の代理にする遊びです。例えば、アンパンマンごっこなら、自分はアンパンマンでは無いのに自分をアンパンマンにしているのです。自分をアンパンマンという漫画物語のキャラクターに貸しているのです。アンパンマンを自分の代理品にしています。

成り切り遊びも代理品を使いこなしていることになるのです。

II. ごっこ遊びは代理品を使った遊び

ごっこ遊びは、ふり、見立て、成り切り、の三つから成立していて、この三つはいずれも代理品を使いこなすという共通のやり方によって成り立っているというわけです。

1) ごっこ遊びの育て方

代理品を意図的に使いこなしているという意識を子どもの心の中に育てることが大切です。初めは真似して遊んでいますが、そのうち、代わりにしているんだという気持ちがかきりしてくると応用度が上がって来て、レベルの高い複雑なごっこ遊びに発展します。

意図的意識を育てるためには、その子がしているごっこ遊びを大人が解説してアナウンスしてあげることです。

例えば、子どもが空のコップで乾杯したら「ゴクゴクおいしいね」と、長方形の積み木を走らせていたら「そうだね、四角い積み木はバスのボディだね」と、レジ係になっていたら親はお客さんになって「これ100円ですかあ、高いですね。もっと安いのはありませんかあ」などと、子どものごっこの世界に入って、子どもの想像を込めた動作を言語化してアナウンスし、その気を高めて迫真の演技になるように導くことで、ごっこ意識を育てることが出来ます。

B. 言葉の発達

I. 初語はなぜ「マンマ、ママ、パパ、ブーブ」？

1) 口唇音

赤ちゃんは、10ヵ月頃になると五十音の発声音のうちの、口唇を急激に開いて発声するマ、バ、ブ、パの発声が出来ようになります。舌を使わないで唇だけで発声できます。赤ちゃんは生まれてから毎日何百回もチュッチュ、チュッチュとおっぱいを吸っています。これは唇とほっぺの筋力トレーニングをしていることになります。10ヵ月になると十分な筋力がついて、口唇をパッと破裂させるように開いて、パ、バ。マが発声できるようになるのです。

2) 大人による真似し易い手本提示による教育

例えば、1歳前後の赤ちゃんを抱いている大人の前を自動車が通ったら、大人は車を指差しながら「ブーブだ」と語り掛けるでしょう。「ジドーシャ」と語り掛ける人はいないはずで

す。これは何故でしょう。大人は1歳の子は「ジドーシャ」は発音できないが「ブーブー」なら発音できると無意識のうちに思っているからです。1歳の子に「ジドーシャ」と声掛けしたって、子どもがま真似て「ジドーシャ」と言えるはずは無いと無意識のうちに思っているからです。「ジドーシャ」より「ブーブー」の方がずっと真似し易い手本になっていると思っているわけです。

この真似し易い手本を提示していることになっていることが重要なのであります。これは子どもが発音し易い、言い易いような言葉使いを大人が教えていることになります。つまり、立派な教育、学習指導をしていることになります。

3) 擬声語・擬態語

では、なぜ「ブーン」ではなく「ブーブー」なのでしょう。自動車は「ブーブー」という排気音を出しながら走る機械だ、というふうに日本人はみんな思っているからです。「ブーン」は飛行機の音で自動車が出す音ではないとみんなが思っているからです。

自動車は「ブーブー」と排気音を出しているから、自動車という意味と「ブーブー」という音、つまり発声音が結び付き易いと言うわけです。その物が出している音なり声を言葉として使う場合を擬声語と言います。牛を指して「モーモー」と言ったら、これも擬声語です。

子どもとボール遊びをする時、大人は良く「ポーン」と言いながらボールを投げます。ボールを放り投げる動作、姿態を「ポーン」と形容しているわけです。「ポーン取っといで」と子どもに言って、子どもがボールを取って来たら、子どもにとって「ポーン」はボールという言葉の意味することになります。この場合の「ポーン」を擬態語と言います。

4) 発声音に意味がくっつく

言葉は発声音に意味がくっついて、それをみんなが認めることによって成立します。小学生が車を指差して「ブーブー」と言ったら、違うでしょ、と大人に言われるでしょうが、1歳の子だったら親は大喜びして認め、赤ちゃんを褒めるでしょう。

赤ちゃんは親が大喜びし褒められることによって、次の言葉、つまり、声音と意味のくっつきを覚えて、言葉が増えます。しかし、増える言葉はバ、バ、マの口唇音を使ったものに限られますから、初語は「マンマ、ママ、パパ、ブーブー」が多いというわけです。

II. 言葉の誕生

母親の多くは、赤ちゃんに離乳食を食べさせる時「リニューショク」ではなく「マンマ」とか「マンマだよ」と声掛けしながら口に入れてやります。赤ちゃんは離乳食を食べ初めてから初語を発するまでの6ヵ月以上に渡って、毎日離乳食のたびに「マンマ」「マンマ」と聞かされています。

マの発声ができるようになった1歳前後の赤ちゃんが、何とはなしに「マンマ」と言ったとしましょう。この時、母親はどう思うでしょうか。うちの子が、御飯、と言ったと思ひ込む母親はいるはずですが、そう思い込んだ母親は大喜びで赤ちゃんの口に食べ物を運ぶでしょう。そういう母親はそれを何回も繰り返すでしょう。

そうしたら、赤ちゃんはどう思うでしょうか。「マンマ」と言うと食べ物が口に入る事を理解するでしょう。それが分かった赤ちゃんが、食べ物が欲しくなった時に「マンマ」と言って食べ物を食べることが出来たら、その時に言葉が誕生したことになります。

食べ物を食べたいという“気持ち”をお母さん、つまり相手に伝えられたからです。分かり合い、つまりコミュニケーションが成立したわけですから、コミュニケーション手段としての言葉が成立したという訳です。

III. 言葉は代理品

1) 「アイスクリーム」「ゲフロールネ」

例えば、子どもに「お母さん、アイスクリームちょうだい」と言われたら、「冷凍庫にあるか

ら取っといで」と教えられるでしょう。しかし、誰かに「ゲフロールネ、下さい」と言われたら、どう答え、どう行動します？

アイスクリームという発声を聞いたら、日本人の大人なら誰でも凍っているお菓子だから冷凍庫に保存してある、とすぐ分かります。つまり、発声を聞いただけで、実物が無くても分かるわけです。

ゲフロールネという発声を聞いて、日本人の多くは「ん？」と思うでしょう。でも、実物を見せられれば、誰でも「なあんだ」と思うでしょう。ゲフロールネとはドイツ語でアイスクリームのことです。

2) 言葉は発声音だけで分かるもの、実物が無くても

アイスクリームは実物無くても発声音だけで分かるけど、ゲフロールネは実物を見せられないと分からない。アイスクリームは実物が目の前に無くても、アイスクリームと聞いたら頭の中でアイスクリームという発声音とアイスクリームの実物をくっつけられるから分かる。でも、ゲフロールネは実物を見ないと頭の中でくっつけられないから分からない。つまり、ドイツ語なんて知らないから頭の中でくっつけられない。だから、実物を見ないと分からない。

3) 言葉は代理品

日本語は分かっているから実物が無くても通じる。ドイツ語は知らないから実物がないと通じない。

言葉が通じるのは、実物が無くても、発声音だけで分かるからです。だから、言葉は実物の代理品と言うことができます。実物が無いと通じないドイツ語の発声音は代理品の役目を果たしていない、つまり、日本人の間では言葉になっていないということになります。

言葉を操るということは代理品を操るということになります。

4) 初語の「マンマ」も代理品

1歳前後に言うようになる「マンマ」も目の前に食べ物が無くても、マンマという発声を聞いただけで、食べ物が欲しいんだ、と相手の気持ちが分かれば言葉の完成というわけです。

IV. 初語とふり遊びは同時期に発生

初語を言い出す時期とふり行為をする発達段階はほぼ同じですので、この時期に代理品を使いこなす智慧が育って来ているということになります。

代理品を発声音で使いこなすのが言葉、代理品を動作で使いこなすのがふり遊びです。

V. 1歳半の言葉の特徴

1) 1歳半の子どもの言葉のベストテン

1位；ワンワン、2位；パパ、3位；ママ、4位；バイバイ、5位；マンマ、6位；ブーブー、7位；ニャンニャン、8位；ネンネ、9位；イタイ、10位；チョーダイ。

半分は、マ、パ、バ、ブの口唇音です。9位までのうちの六つがワンワンなど同じ音の繰り返しです。マンマ、ネンネ、イタイもほとんど繰り返しです。10位のチョーダイのみが繰り返しではなく、別の音の組み合わせです。1歳半の赤ちゃんは同じ音を繰り返すのが得意なので

す。

なお、ワンワン、ニャンニャン、ブーブーは擬声語です。

2) 擬声語の成立

例えば、大人がかなづちのおもちゃで叩きながら「トントン」と声掛けして手本を見せると、子どもは大抵「トントン」と言いながら打つ真似をします。これを何回もしているうちに「トントンッテ」→「トントンッテ、ヤンノ」→「トントンッテ、ユウノ」というふうに変化させて「トントン」=かなづち、に名詞化します。

VI. その子語

その子独特な言い方をする子はたくさん居ます。初めての大人にはなかなか通じませんが、いつも一緒のお母さんにはちゃんと通じます。これを、その子語、と称します。

例えば、救急車を「キティチャ」、消防車を「ボーボーバ」、パトカーを「パコマ」、運転を「ウンチ」、バナナを「アナナ」、テレビを「ビビ」、白樺を「ヒラカタ」、トラックを「トダッタ」、電車を「ゲンタ」、ヨーグルトを「グルグルト」、チョコレートを「コチョコレート」、眼鏡を「メナネ」、開くよ、を「アブヨ」、見える、を「イミル」、ぶつかった、を「ベッタッタ」、などなど。

その子語をしゃべる子は頭の中では正しく言ってるつもりなのです。でも、口と舌の使い方が上手くないために正しい日本語にならないのです。

靴を「くぶ」と言う子にお母さんが靴を指して「くぶ」と言ったら怒り出し、お母さんが「くつ」と言い直したら納得した、というエピソードがあった子がいました。

その子語をしゃべる子に言い直するように迫ると、逆にしゃべらなくなっちゃう子がいるので、発音が正しくなくても言いたいことが分かったら、分かってあげることが大切です。

救急車を指差して「キティチャ」と言ったら、大人は「そうだね、キューキューシャだね」と正しい日本語に直して言ってあげて、通じている事を本人に知らせることが大切です。しゃべらなくなっちゃったら正しく言う練習が出来なくなっちゃうことになりますから、返って良くない事に成ります。

VII. 二語文

「パパ、バイバイ」「ママ、あっち」などの二語文は単語をつなげることで成立します。普通は2歳頃に発するようになります。

順序通りする、予定通りするなど短いまとまった行動が可能になると、二語文を発するようになります。

通常の私たちの生活は台本通りにやるという行動で成り立っています。例えば、登校は学校までいつも同じ道筋を歩きますので、登校のための台本があって、毎日それを台本通りに実行していることになります。つまり、一定の順序、作法、ルールがある日常行為ができるようになると二語文を発します。二語文を発する子は、大抵は、ままごとやおもちゃの野菜などを切って、それをフライパンに入れて、レンジの上で炒めたりするふりをして、次にそれを皿に盛って、「はい、どうぞ」と言いながら他の人に食べるように勧めることができています。

トイレが終わったら水を流して手を洗ってタオルで拭く、帰宅したら靴を下駄箱に入れてコートを脱いで洗面所で手を洗う、など短いけど繋がった生活習慣順序を身につけることが、二語文の発語に繋がります。

VIII. 助詞

二語文の次には助詞を発するようになります。

所有格の「の」、一緒に意味する「と」「も」、依頼を意味する「やって」「見て」などの「て」、終助詞の「ね」「よ」、主語を表わす「は」「が」、方向を表す「に」「へ」などが出て来ると、文法の理解が進みます。

主語、述語、目的語などの文の構造が分かって、言葉による論理的思考が育ちます。助詞出現以前の言葉は“伝える道具”であったわけですが、助詞が出て来て“考える道具”になった、というふうに言うことができます。

助詞を促すようにするには、大人が助詞をはっきりさせた言葉掛けをすることが大切です。「ママ食べてる」ではなく「ママが食べてる」、「パパ会社」ではなく「パパは会社」、「上行くよ」ではなく「上に行くよ」など。

IX. 叙述と会話

1) 叙述とは

助詞が出て単語が三つ四つ繋がってお話できるようになったら、叙述が重要になります。叙述をたくさんすると会話が上手になって行きます。

叙述と言うのは、今見ているもの、今やっていること、を口に出して言うことです。言わば、“今”“現在”を語ることです。

子どもは、例えば、犬を見つけたら「あっ、犬だ、かわいいね」とかよく口に出して言います。相手に伝える必要がないこと、心の内に収めておいても良いことを口に出すことがあります。これが叙述です。

また、積み木で遊んでいる時「これをここに置いて」とか「青いのを乗せて」とか言いながら積み、倒れたりしたら「アッ、崩れた」「壊れたあ」とか言い、黙って遊んでいる方が少ないぐらいです。これも叙述です。

大人はいちいち言わずに黙っていますが、実は頭の中でブツブツ言っていることはよくあります。これは内言語で叙述していることになります。

2) 叙述のし合いっこ

話題を間に挟んでの言い合いが叙述のし合いっこです。

例えば、散歩していて犬の親子を見つけたとして、親が「見て、ほらワンワンいるよ。大きいねえ」と話し掛けたら子は「あ、赤ちゃんもいる」とか言い、親がさらに「お母さんワンコは茶色だね」と言ったら子は「赤ちゃんは白だあ」とか言ったとしたら、これは話題、この場合は犬の親子、を間に挟んだ叙述のし合いっこ、をしていることになります。

親子それぞれ自分が見たまんまを言葉に出して言い合いこっこすること、これが叙述の言い合いこっこです。次の発達段階の会話に発展します。

3) 会話

会話というのは最初は質問に対して答えるという形を取りますが、その後は意見の言い合いこっこという形で続きます。意見は過去のことであったり、自分の心の内のことであったりします。過去や心の内は見えません。

ですから、見たまんまを言う練習、つまり叙述のし合いこっこがたくさん出来ていれば、自分の意見、自分の思い、を言葉にすることが上手になり、会話が上手くなるのです。

よくしゃべるんだけど何を言いたいかわからない、と心配されてくる子どもの場合は、この叙述のし合いこっこという練習が足りないから、自分の思いを上手く言えずに、相手に通じ難いというわけです。

4) 親が代弁する

子どもがお話上手になるためには叙述のし合いこっこが大切であることを説明してきましたが、叙述がまだ上手く出来ない子の場合は、子が言いたそうなことを親が代弁して言っちゃった方が良いのです。

子が気持ち、意見、叙述が上手くできずに言いよんでいる時、親が代わりに子の言いたいことを言っちゃうと、子にとっては真似し易いお手本が提示されたことに成ります。言いよんでモジモジイライラしている時に、イメージそっくりの手本、飛びつきたくなる手本を提示されたら、誰だってそれを利用したくなります。それが良い効果を生むのです。

真似し易い手本があれば学びは進みます。手本の無い学びはありません。そもそも“学ぶ”という言葉は“真似る”から生じたのですから。

ですから、子が真似し易い手本を出すことが非常に大切なのであります。これは決して甘やかしては無く、良い教育です。

X. 思い出話

会話の次は思い出話をするのが大切に成ります。思い出話は日記を語るというふうな意味を持ちます。

今日は幼稚園で何してきたの？と問いかけると、「うーん、分かんない」とそこで会話が途切れてしまうことがあります。こういう場合はどうしたら良いのでしょうか。

1) お話聞くタイム

毎日でも月水金でも良いのですが、決まった時間に決まった場所で10～15分間の親子対談の時間を設けて下さい。その時、「今日は幼稚園で何してきたのかな？お絵描きかな？サッカーかな？」と、2択3択の質問にして、子どもが答え易いようにして下さい。

その際、正解が含まれている2択3択でも良いのです。その方が良いこともあります。クイズではありませんので、むしろ正解が入っていた方が良いのです。目的は子どもに幼稚園の出来事を思い出して語ってもらうことですから。

話題は朝の出来事から昼近く、次いで、昼、更には午後と時間的に前の方から後の方に順

行性になるように質問をして下さい。順序がバラバラだと子どもは思い出しにくくなりますので。

ヒントはどんどん出して下さい。図星のヒント、つまり、正解を入れた2択3択でも良いのです。

大事なことは時間設定したら、必ずその時間に実行することを繰り返すことです。いつもの時間にいつもの場所でいつものやっさ、という習慣を作ってください。そうすると、朝幼稚園に送り出す時「今日は帰ったらお話聞くタイムだよ」と声を掛けておくと、子どもは一生懸命覚えて帰ろうとするようになり、記憶力も良くなります。

お話聞くタイムを繰り返すと必ずお話は一層上手になります。

C. 遊びが言葉を育てるわけ

ごっこ遊びも、言葉も、代理品を使いこなす、という共通の智恵を働かせることによって成立しています。

代理品を動作で使いこなすのがごっこ遊び、代理品を発声音で使いこなすのが言葉、と言うわけで、根っこは同じ智恵を使った行為というわけです。

ですから、代理品を使いこなす智恵をごっこ遊びの中で磨けば、言葉の発達に繋がる、というわけです。

言葉の遅れた子は発声音を使って代理品を使いこなすのが苦手な子と言えます。

遊びは子どもにとって仕事のようなもので、遊びを苦手とする子は滅多にいません。その子が得意とする遊びを広げたり増やしたりして、ごっこ遊びが楽しくなるように仕向けることが、言葉の発達に繋がります。

1) 遊びを通じて言葉を増やすには

ごっこ遊びの時に、黙っている子はあまりいません。発音があはつきりしない子どもでも何かしら「ゴニョゴニョ」と呟きながら遊んでいます。大人はその呟きを聴き取り、子が言いたそうなことを正しい日本語の発音で代弁してアナウンスしてしまうと、子どもにとっては真似し易い手本が提示されたことになります。

手本が真似しやすければ学習は進みます。だから、子どもの言葉が増えて行くことになるのです。